

特集

拡大する医療・介護需要

新年、明けましておめでとうございます。

激動の政権交代が行われた昨年から、新たな年を迎えたわけです。本年はどのような1年になるのか、国民1人ひとりが固唾を呑んで見守っていることと思います。

さて、増え続ける高齢者とともに、医療・介護の需要は増すばかりであり、提供側であるわれわれにとって、事業規模の拡大・新規事業の創設など、大きなチャンスと捉えることができる。もちろん、その根底には社会保障費の増大という大問題が横たわっているが、増加する高齢者とともに、どのような街作り、国作りをすればより豊かな国になるのか、という視点から執筆を依頼した。

東京大学・辻哲夫教授には「超高齢社会における医療の展望」として、今後の医療・介護における望ましい発展形について執筆をお願いした。続いて、慶應義塾大学・田中滋教授には「地域包括ケア」として、医療・介護・福祉の一体的提供についての解説をお願いした。

まだ定義が曖昧な亜急性入院医療については、「地域連携病院」という概念を筆者が担当した。また、「在宅医療の本質と未来」を、医療法人アスミス・太田秀樹理事長をお願いした。さらに、今後の介護保険施設のあり方について、慶應義塾大学・高木安雄教授をお願いした。いずれも、今後の医療・介護について貴重なご意見をいただいた。

事例としては、「急性期入院医療と在宅医療—都心の脳卒中医療」の問題を日赤医療センター・鈴木一郎脳神経外科部長に、「医療介護複合体事業の展望」を市比野記念病院・鉾之原大助理事長をお願いした。

ともすると、超高齢社会を社会保障費の増加という側面で悲観的に捉えられる場合が多いが、本特集ではそれを前向きに受け止め、どのような社会を創造して行くか、を主眼点として捉えるよう心がけた。今後の医療・介護にかかわる方々に少しでもお役に立てれば幸いである。

猪口 雄二

医療法人財団寿康会 寿康会病院 理事長